

海外文献紹介

きこえない女性の人生

吉田 仁美

1. はじめに

本稿で取り上げる『きこえない女性の人生—3人の自叙伝』(*Deaf Women's Lives: Three Self-Portraits*, by Bainy Cyrus, Eileen Katz and Celeste Cheyney, and Frances M. Parsons, 2005, Gallaudet University Press, 304p., Washington, D.C.) は、米国に住むさまざまな異なる経歴をもった3人のきこえない女性がお互いの経験を共有し、彼女たちの生活状況の相違ばかりでなく、顕著な類似性も明らかにしている非常にユニークなエッセイ集である。

既報(吉田2009)で吉田は、米国のきこえない女性に関する英文文献の紹介を2件行った。今回紹介する文献は、前回紹介した文献(研究書)とは異なり、大衆向けに書かれたエッセイ集であるが、その内容は、筆者がこれまで興味関心を抱いてきた聴覚障害者のアイデンティティ研究、米国の Deaf Women's Studies についても共通する多くの問題提起をしている。

タイトルにあるように、本書は、3人のきこえない女性たちの自叙伝によって構成され、以下に示すとおり、三部から成っている。

Introduction

Brenda jo Brueggemann

All Eyes

Bainy Cyrus

Making Sense of It All: The Battle of Britain Through a Jewish Deaf Girl's Eyes

Eileen Katz and Celeste Cheyney

I Dared!

Frances M. Parsons

ここで著者の略歴を簡単に紹介しよう。Introductionの部分で登場する著者、Brenda jo Brueggemann は、オハイオ州立大学の准教授(専門は英語学と女性学)で、彼女は、障害学のパログラムおよびASL(American Sign Language; 米国手話)プログラムを担当している。

自叙伝第一部の著者 Bainy Cyrus は、バージニア州で聴覚障害学生、障害学生向けのカウンセラーを務めている。第二部は Eileen Katz と Celeste Cheyney の共著である。Eileen Katz は、25年間マンハッタンの英語学校で米国手話の講師として勤務した後、現在はニューヨークのブルックリンで、高齢者向けの聴覚障害者市民団体の手話講師を務めている。共

著者の Celeste Cheyney は、米国の学校で米国手話の講師を40年近く務め、またニューヨークで難聴者向けの様々なプログラムにおける新人教育者の指導にあたっている。第三部の著者 Frances M. Parsons は、ワシントンにあるギャロデット大学の准教授であり、専門は美術史である。

これらの著者、Bainy Cyrus, Eileen Katz と Celeste Cheyney, および Frances M. Parsons は、互いに異なった時間・状況および場所において、ろう者または難聴者として、また女性として、自分自身の物語として書いている。

2. 本書の概要

本書の概要として、まず3人の自叙伝のそれぞれの内容について簡単に説明したい。

第一部の Bainy Cyrus 著の“All Eyes”「全身が目」では、マサチューセッツ州ノーサンプトンのクラークろう学校で口話法を使用することを教えられた幼児期の彼女の生活が生きて描かれている。彼女の教育・訓練に使用された方法、すなわち口話法に対する彼女の説明¹は、聴覚障害をもつ子どもたちが読むことおよび話すことを学ぶために行った異常な量の作業について詳しく述べている。Cyrus はまたクラークろう学校で出会った2人の少女たちとの生涯にわたる友情の重要性について、また彼女たちが辿った異なる進路が成人としての彼女にどのように影響を与えたかを述べている。

Celeste Cheyney に話した Eileen Katz の物語²は第一部での Cyrus の1世代前のきこえない少女の人生を垣間見させるものである。「それをすべて理解する—きこえないユダヤ人少女の目から見た英国の戦闘」と題した彼女の著作のなかで、Katz は1938年から1941年にかけての4年間の混乱した出来事について次第に学んでいった、「誰が」、「何を」、「どこで」そして「なぜ」といった言葉を並列的に述べている。彼女とその仲間の学生がこれらの質問の意味を理解するにつれ、彼女たちはまた英国に対するナチの空襲の脅威を実感したのである。Katz はまた、彼女とその級友たちが聴覚障害者であり、かつユダヤ人であることによって直面した複合的な危険についても述べている。

Cyrus と Katz が主として口話指向であるのとは対照的に、第三部の著者 Frances M. Parsons は「トータル・コミュニケーション」³について講義するために1976年に行った1年間の海外旅行について書いている。Parsons はイラン・インド・セイロン・タイ・マレーシア・シンガポール・香港・フィリピン・オーストラリアおよびアフリカの国々に旅行し、

1 例えば、同じ単語を何回も、最大で35回も、繰り返す等、本文で具体的に説明されている。

2 第二部は、Eileen Katz が Celeste Cheyney に語った内容を Katz の自叙伝として綴っている。

3 トータル・コミュニケーション (Total Communication) は、1968年にカリフォルニア州サンタアナ学区の聴覚障害児教育プログラムで用いたことに端を発する (都築1997:100)。トータル・コミュニケーションの定義は、1973年10月、第45回全米ろう学校長会議においてトータル・コミュニケーションの定義に関する委員会設立の提案がなされ、議論の結果、1976年5月の第48回大会において、以下に示す定義が提案された、すなわちトータル・コミュニケーションとは、「聴覚、手指、口話モードを結合させる理念」である (都築1997:101-102)。

管理者、教師、および聴覚障害学生にサイン、読唇術、筆談、およびその他の利用可能な手段を用いて意思疎通を図る方法を教えた経験をもつ。彼女の悲惨で心を引き付ける逸話からは、教育省学校、病院、診療所、宮殿、最貧困層のための小屋およびすべての種類の住宅およびアパートを訪問した様子が伺える。全体として見ると、彼女の旅行は「私は敢えて行った！」という彼女のタイトルの適切さを証明しているといえよう。

3人のきこえない女性の生きた時代と状況は非常に異なっているが、第一部 Cyrus の場合とほぼ同様、第二部 Katz の第二次世界大戦中にロンドンで若いユダヤ人少女であった頃の初期の生活の話もまた、きこえない者ときこえる者の老若男女を含む誰もが物事を理解するために確かに一生懸命努力していた頃に、「全身が目 (All Eyes)」であり、そのすべてを理解するために非常に一生懸命に努力したことがわかる物語である。Katz 自身の経験に基づいた物語からは、戦争とロンドンに対する影響に関して彼女が遭遇したさまざまな画像と文章をつなぎ合わせようと一生懸命努力しながら、言語（書かれた英語と英国の手話の両方）を習得し、理解しようとひたすら学習している様子が感じられる。戦時中のきこえない子どもたちは、爆弾を落とす飛行機、塹壕、レーダー塔、そしてしばしば新聞に載る腕を突き出して一種の敬礼をしている怒った顔の男性等、以前は知らなかった対象物について単に質問する方法、そしてそれらを手話と英語の間で翻訳する方法を学ぶ必要があった。英国の戦争が始まり、Katz はそれをすべて理解するためにさらに一生懸命勉強した。

当時の Cyrus とほとんど同様、Katz は、彼女たちの集中的で好奇心の強い知性になり助けられながら「外国語」の意味をつなぎ合わせ、彼女の目から意味を構成することを学んだ。彼女たちはまた手紙作家として1つの歴史を共有した。2人の若い少女とともに、家族から遠く離れたこれらの口話法の学校の生徒だったとき多くの手紙を書いており、例えば Katz と Cyrus の物語が数十年間の時間と海洋によって隔てられていても、彼女たちが手紙を書いたことがともかくも彼女たちを結びつけている。

さらに、それが彼女たちをこのエッセイ集の3人目の著者、Frances M. Parsons に結びつけている。Cyrus や Katz と同様、Parsons もまた口話法の学校で教育を受けてきている。そして Cyrus や Katz と同様、彼女は書くことへの何らかの親しみを見出した。

Cyrus と Katz は若い学生の頃によく実家に手紙を書いていたが、Parsons の著作はその大部分が、他のろう学校で「トータル・コミュニケーション」について教えるために彼女が世界中を旅していた数年間の日記（ある種の彼女自身への手紙）から成っていた。

子どもたちの教育のための複合的方法（口話と手話による指導、いわゆるバイリンガル教育）が現れたころのそのような指導の使節として、またアルゼンチンのような場所で彼女が会った、圧迫され、さらには虐待されている多数の聴覚障害児の自称代弁者として、Parsons の伝記抜粋 “I Dared!” 「私は敢えて行った！」は、この第三部の中で彼女との経験を共有している他の伝記部分と共通する同一の誇り、平静さおよび意思疎通への切望感を表現している。

これら3人のきこえない女性作家たちは全く異なった時間と状況の中で生きていながらなお全員が口話法による指導と手話法によるそれとの間に身を置いていた（または、置かれていたといえる）。同様に、彼女たちは3人とも濃密に絡み合った彼女たちのアイデンティティの各側面を明確に区別することが難しいと思っている様子も本書から伝わってくる。例えば「耳のきこえない生活を語る」会議では、彼女たちは誰もそれぞれの物語または人生のうちのどの部分が「ろう者であること」（または彼女たちに該当するその他多くの事柄）と対立し、またはそれに結びついている「女性」であることに関連しているかを区別することができず、また区別しようとはしなかった。

本書の Introduction 部分で、Brueggemann は、「読者が“All Eyes”『全身が目』，“Making Sense of It All”『それをすべて理解する』および“I Dared!”『私は敢えて行った！』を読んでいるうちに全員が、Helene Cixous が示唆しているように、書くことおよび書いたものにより、どのようにして女性が象徴的女性の中に、また象徴的女性によって所有される場所以外の場所で、すなわち沈黙以外の場所で女性を確認するようになるかを理解できるようになることを期待している」（p.x）と述べる。さらに、「勇敢にも彼女たちの目でそれをすべて理解しようとし、3人の（きこえない）（女性）作家たちは自身の身上話を書くことにより世界中でそのような確認を行う挑戦を行っている。それらの文章の読者として、われわれはそのすべてを聴き、勇敢に行い、理解し、そしてわれわれもまたそこで沈黙以外の場所で確認される」（ibid）と言う。

これら3人のきこえない女性の物語の相乗効果が、彼女たちの経験の違いにもかかわらず、すべての聴覚障害者の人生を貫く共通の糸を明らかにしていると筆者には感じられた。

3. 全身が目—第一部 Cyrus の自叙伝—

本稿では、3人の自伝の詳細のすべてを紹介するのは困難であるので、本書の代表作といえる Cyrus の「全身が目」に注目して、以下筆者より邦訳紹介をしたい。

Bainy Cyrus は第一部の「全身が目」の中で、米国で第1級の最も歴史の古い、口話でのコミュニケーションを用いる聴覚障害者教育機関クラークろう学校⁴での教育的体験、主に口話法による教育について叙述している。彼女は、1960年代および1970年代における聴覚障害児としての自分の言語の開発、言語獲得のプロセスについて、話された英語と書かれた英語の両方における構造のニュアンスを理解するために一生懸命勉強したことを感動的に書いている。しかし Cyrus の話は、彼女が当時のきこえる同級生と同等の読み書き能力を達成するために苦闘したにもかかわらず、自分に失われている能力ばかりでなく現在保持し、他人よりも優れている能力をも認識しているという点で非常に前向きな姿勢が見られ、またかつ力強い様子で描かれている。聴覚障害者は「全身が目」とすると Cyrus

4 クラークろう学校設立については、吉田（2009：108）で触れている。

は言う。なぜなら、彼ら彼女らは目を使って多くのことを「読む」からである。これは、同じくきこえない筆者にはよく理解できる話であるが、聴覚障害者は、音や音声による情報を取得するのが非常に困難であるので、彼ら彼女らは、相手の言っていることを相手の口を目で見て読み取り、また相手がどう考えているか（感じているか）を相手の表情から読み取る。さらに相手の身振り手振りから、相手が何を言わんとしているかを読み取ろうと必死になる。このようにして聴覚障害者は、聴覚機能が失われた分、他の器官（この場合は視覚が中心であるが）に頼って、相手とコミュニケーションを取る。Cyrus の言う「全身が目」というのは、聴覚障害者がコミュニケーションをとるうえでの特徴を実にうまく表現している。

第一部の内容の一部を Cyrus は、2004年11月にギャローデット大学会議センターの講堂で聴衆の前に立ち朗読した⁵。「耳のきこえない生活を語る」会議での彼女の朗読内容を、彼女は自伝である「全身が目」の中のいくつかの断片を1本の糸で綴ることにより、聴衆を彼女のユーモアで喜ばせ、今やすでに「作家」となっている事実について聴衆を驚嘆させたばかりでなく、感謝の気持ちもいだかせたように、確かに彼女はスピーチへの挑戦（また後に著作への挑戦）を始めていた。スピーチで彼女は、自身の言語獲得のプロセスにおいて、文法上のミス、読み間違い等の失敗を幾度も重ねたことについて語っている。無論、聴覚障害者（先天的な聴覚障害者は特に）にとって聞こえる人と同等の言語獲得は非常に困難であり、一定レベル以上の文章能力に達することも困難である。しかし、Cyrus の言語獲得のプロセス、また作家として文章を書く作業と真剣に向き合い一生懸命努力した姿に、同じくきこえない女性である筆者は大変感銘を受けた。

導入部分で Brueggemann が、Cyrus の作家としての才能を賞賛している。「著作は『あまりにも高度な仕事で』、『偉大な男性の専売特許であり』また女性にとってときには『愚かしいこと』でさえあるかも知れないが、Bainy Cyrus の手にかかればそれは明らかに可能であり、強力であり、また前途有望である」(p.viii) と。

以下より、Cyrus の幼少期から成人期まで、すなわちきこえないひとりの女性の人生の内容に触れていきたい。

Cyrus が、聴覚障害と診断されたのは2歳半のことであった。Cyrus が一言も話したのを聞いたことがなかったため、心配した両親は、Cyrus を聴覚検査のためにジョン・ホプキンスに連れて行き、そこで非常に重度の聴覚障害を持っていると診断された。Cyrus の母は、Cyrus の耳が聞こえなくなった原因が、妊娠中に風疹にかかったことであることを知り、打ちひしがれた。1960年代のかなり一般的な考え方として、手話を学ぶことを禁じることが決まり、ほとんど無に等しかった言語能力を開発するために、聞き取りおよび読唇ゲームが日課となった。そして、Cyrus の最初の補聴器を受け取ったときの忘れられな

5 この会議の様子は、以下 URL で確認することができる。

URL:<http://gupress.gallaudet.edu/gupiconference/index.html> (2009/08/05, 筆者アクセス)。

い場面があった。それは4歳半のときについにCyrus自身が聴覚障害者であると知った時であった。気の進まない両親によってクラークろう学校に取り残されるという忘れられない経験をした後、Cyrusは自宅から12000マイル離れた評判のよい学校に適應できるようになり、クラスメイトともよく対話をした。クラークろう学校時代、Cyrusをほっとさせたことは、全員が胸の上の大きな補聴器⁶をつけていて、皆同じに見えたことである。Cyrusは毎週末に実家に帰ることができなかった数人の州外の学生のうちの1人であったため、寄宿舎に住んでいた最初の口話法の教師であったミラー先生と親しくなった。醜い特大のヘッドホンをつけ、Cyrusは羽根のはためきを見ながら、例えば「クッキー (cookie)」等の語彙を発音し、またミラー先生の鼻にCyrusの指を押し当てながらMの音を出すことを学んだ様子などが本書で詳しく描かれている。言語能力の開発が最詳版のウェブスター辞典のように少しずつゆっくりと進んでいく間、クラスメイトとCyrusは簡単な文章を理解しようと努力した。Diane KarasとCheryl Robbinsは、彼女たちの家族が毎週末に代わる代わるCyrusをマサチューセッツ州内の自宅に連れて行ってくれたため、彼女の親友になった。CyrusはDiane KarasとCheryl Robbinsと同室に住み、厳格な教師たちやうんざりさせる寮母たちに取り囲まれながらユーモラスな日々を共有した。2人の友人が毎週末に彼女を招き続けてくれたため、医師の娘であったCyrusにとって、DianeやCherylたちと触れ合うことは、他の家族の労働者階級の文化について学ぶ機会でもあった。とある飛行機の内部を探検して喜びながら自宅に帰り家族と一緒に過ごしたのは1年にほんの数回だけだったが、家族とは手紙で毎週連絡をとっていた。かつてCyrusの家族全員が車に乗って大学を訪れ、3人の兄がキャンパスで騒ぎを引き起こし、聴覚障害の少女全員に追いかけられたことがあった。しばらくたって、Cyrusを地元の通常の学校に転校させるという両親の決定を知り、それに関してCyrusは複雑な気持ちを抱いた。7年間の口話教育の後に最愛の聴覚障害の友人、とりわけDianeとCherylと別れるという現実にはCyrus自身は、向き合うことはできなかったが、きこえる人の世界に入る勇気を持つとした。

11歳になり語彙数が幼稚園児並みのレベルであったけれども、通常の学校の3年生のクラスに出席し、最初の日には数百人の見知らぬ子どもたちに付きまといわれた。これまで彼女はきこえる人の世界に適應していなかったため、それはかなり大きな変化だった。恐ろしく世間知らずで、適應することに必死であったCyrusは、近所の少年たちの前で裸になるよう強要するような不良少女と友達になり、それを友情のために行った。聴覚障害を理解してくれる忠誠な友人を作る方法を学ぶにはしばらく時間がかかった。孤独な日々であったが、Cyrusがバスケットボールチームで上手にプレーして以来、彼女の社会生活は改善された。スポーツはほとんどコミュニケーションを必要としなかったため、彼女に自尊心を与えた。Cyrusの成績がゆっくり向上していく一方、自分でも驚くほど語彙を増やし、数々の定型句を学んだ。今や長距離となった友情を保つことを切望していたCyrusは、

6 1960年代の補聴器は胸ポケットに機器をつけて耳にイヤホンをつなぐ型が主流であった。

Diane と Cheryl に定期的に手紙を書き、また夏休みに彼女たちを訪ねた。

高校に通うようになると Cyrus は、初恋のボーイフレンドを持ったにもかかわらず、きこえる人の世界での社会生活がさらに一層難しいことを実感した。なぜなら、小さいころと異なり、友人と走り回ったりすることよりも、最も一般的に行ったことは丸く輪になって座り、話すことだったからである。集団でのコミュニケーションは聴覚障害者には非常に困難な行為である。聴覚障害を持つティーンエイジャーにとって、それがどれほど辛いことであったかを想像して欲しい、と彼女は言う。筆者も同じ思いをしながら思春期を過ごしたことをふと思い出し、Cyrus と同様の気持ちでさらに本書を読み進めた。孤独な思いを抱えながらも、Cyrus は何とか学業とテニスに集中した。Diane がクラークろう学校を卒業することになったとき、Cyrus は16歳の彼女が12年間の特殊教育の後に通常の学校に通い始めて辛い日々を過ごすのではないかと心配した。自分と同じ思いをするのではないかと、他人事ではいられなかったのである。一方、Cheryl は、早くからクラークろう学校を出ていて、公立の学校でなんとかうまくやっていた。卒業式の際にクラークろう学校を訪ねたとき、Cyrus は5年間きこえる世界にいたため、不意に古い聴覚障害の友人から孤立している感じを抱いた。当時誰が自分の友人であるか気になるような社会的に不安定な年齢であったが、Diane と Cheryl からは離れまいと Cyrus は心に誓った。大学に憧れ、Cyrus は言語レベルが圧倒的に低いにも関わらず、大学入学の際、拷問のような適性検査に挑戦した。しかし彼女は、身体障害学生に支援を提供している大きな大学に入学することができた。

バージニア工科大学の新入生となった Cyrus は聴覚障害について経験をもつ人が誰もいないという異なった世界に立ち向かわなければならなかった。ここでは2万4000人の見知らぬ人の中で Cyrus はしばしば孤独を感じ、落ち込んだ。これらのきこえる同輩が彼女と共に成長することなく、また聴覚障害とはどのようなものであるのかを理解してくれなかった。社会生活はさらに悪化した。騒々しいパーティーや落ちていく成績にますますフラストレーションを募らせ、Cyrus は自分の部屋で深酒し、1人で感情を爆発させるようになった。Cyrus は、自分がきこえないという障害をもっていることに非常に不満を持っていたが、誰にも、家族にすら、不平を言わずにすべての感情を自分の心の底にしまいこんでいた。しかし、Cyrus は学校で前進し、成功したかった。きちんと勉強して大学を卒業したい、という気持ちが彼女の奥底にはあった。Cyrus のために深い憂慮を示してくれた障害者支援カウンセラーの Wane がいなかったら、こんな結果は得られなかったであろう。彼は Cyrus が取っていたすべての授業に、大学が全額を負担してチューターをつけてくれた。そこで彼女の成績は再び向上し、成績を含め周囲の物事は以前より良くなったが、社会生活はなお困難であり、実際にまだ飲酒の習慣を克服できずにいた。その後、Cyrus は女子学生のサークルに入会し、あらゆる性格の人とつきあうことを学んだ。200人の女子大生が身近にいて、自分の障害に関してあまり自意識を持たなくなった。またそれは自身が人々の前で怯えることなく話すことができたようになった経験でもあった。実際、

Cyrus は自分の聴覚障害を恥ずかしく思わないことを学んでいった。

園芸学の学位を受けた後、Cyrus は仕事を探す前に長い休暇をとるつもりで実家に帰った。Diane と Cheryl には 6 年間も会っていなかったのも、彼女は古いシンボレーを運転してマサチューセッツ州に行くことを決めた。それは感動的な再会だったが、Cheryl に関する“何か”が Cyrus を動揺させた。Cyrus 自身は、長い間、きこえる文化に溶け込み、手話を使わない状況におかれていたため、Cheryl がデフ・コミュニティ⁷に溶け込み、ろう者⁸の男性と婚約していたことに非常に困惑した。しかし Cyrus は何も言わず、次に自分と同じカテゴリに属している Diane を訪ねた。Cyrus は実家に落ちついた後、小さな造園会社での仕事を見つけ、後に長年の友人たちと共にアパートに引っ越した。丁度その頃、経済的自立のために必要な能力を身に着けたため、彼女の自尊心は高められた。しかし Cyrus はまだデートなどで無駄な時間を過ごしていた。ある地元の病院で、スタッフとも、ましてや Cyrus とも意思疎通のできないエイズ患者に出会うという痛ましい状況に直面したことがある。彼女はそのとき初めて手話を学ばないことに対して強い罪悪感を覚えた。

本書の途中で、Cyrus は北へと車を走らせた 2 週間の小旅行を振り返っている。それは彼女の人生で最も忘れられない旅行となった出来事である。なぜならば彼女は聴覚障害についてさらにかなり多くのことを学んだからである。クラークろう学校での同窓会がこの小旅行の主な理由であったが、有名な庭園を訪れ、またギャローデット大学を探訪する機会を得た。この世界で唯一の聴覚障害者のための大学への小旅行は、その雰囲気や在学当時のクラークろう学校とは全く異なっていたため、Cyrus を完全に魅了した。ギャローデット大学で興味深い展示を見ている間に、彼女はそこに本格的な、ろう文化があることを実感した。次にクラークろう学校の同窓会では、以前のクラスメイトの大多数が長期間の口話教育を受けたにもかかわらず手話に切り替えていたのを見て Cyrus はショックを受けた。同窓会の最初から最後まで、700 人の両手が飛び交っていた。そして彼女は口話主義に固執する非常に少ないメンバーの 1 人であり、旧友との意思疎通に困難すら感じた。それは完全なショックだった。しかし Cyrus はなぜこんなに多くの友人がデフ・コミュニティに戻ることを決意したのかを同じきこえない者としてすぐに理解した。

同窓会での経験から、彼女は本を読み、地元の聴覚障害者組織に参加し、またさらには手話教室にも参加して、聴覚障害に関する情報を集める努力を始めた。それが Cyrus に米国の手話対話化された正確な英語といった視点に関して公平な見方をする勇気を与えた。彼女は手話を覚えて、地元のキャンプで聴覚障害の子どもたちと手話を使い、また冗談を言い合って交流することを楽しんだ。驚いたことに、これらの聴覚障害児の両親すら、その多くが聴覚障害いわずきこえないことについてほとんど何も知らないことを Cyrus に告白した。その経験が彼女の本を書くきっかけとなり、人々が聴覚障害についてより多く

7 ろう文化から成り立つコミュニティのこと。

8 ここでいうろう者とは、第一言語を手話とし、ろう文化を支持する者をいう。

知ることを助けることができる機会を享受したいと思った契機であったと述べる。聴覚障害に関する多くの書物に目を通し、きこえない人へインタビューを行い、障害についての理解を深めていった。Cyrus は聴覚障害者にとって最も重要なことはきこえる世界またはデフ・コミュニティ、いずれの世界においても“自分の中にある幸せが大切”であるということを知った。この時、Cyrus はデフ・コミュニティに加わるという Cheryl の決断を尊重できるようになった。彼女自身について言えば、今までに、また今日もお沢山の忍耐を示してくれている Steve というきこえる男性と結婚することにより⁹、彼女は最終的にきこえる世界での真のアイデンティティを見つけ、そして自分自身の幸せを見出している。

Cyrus は、最後の方で次のように述べている。聴覚障害は、他の障害と異なり非常に複雑で、かつ神秘的な障害である、と。聴覚障害者には、デフ・コミュニティを支持するろう者たちの世界にいる者、人工内耳を装用する者、難聴者等々がいて、それぞれのニーズやアイデンティティはひとまとめにできず、複雑多岐である。聴覚障害者には、ろう文化の中だけで生きていく聴覚障害者、かたやきこえる世界の中で人生を積み重ねる聴覚障害者がある。それだけに、きこえない人の人生は置かれている環境によっても大いに異なり、それぞれの幸せの形も異なる。Cyrus 自身は、きこえる男性と結婚をし、現在も結婚生活を続けている。彼女は、きこえる人ときこえない人同士の結婚生活では、お互いがお互いを理解しあうことが大事であると強調する。そしてまた Cyrus は、本書を書くことによって、きこえる人ときこえない人が理解しあう一助となれば幸いであると述べ、第一部を締めくくっている。

4. まとめ

冒頭で述べたとおり、本書は、きこえない女性の人生を記したものである。彼女たちは物語のなかで、「きこえない女性の人生がいかに大変なものであるか想像してほしい」、「きこえないことを理解してもらうことがいかに困難であるか認識してほしい」と読者に訴えている。

本稿では、紙幅の都合もあり、本書の一部しか紹介できなかったが、本書には、きこえない女性ならではの切実なメッセージがいくつも込められている。きこえない女性がかかえる思春期特有の問題、恋愛、結婚、生活上の問題、そして、彼女たちのアイデンティティに関する洞察、成長する過程においてどのコミュニティに身を置くか、環境が与える影響についても描かれている。自身の障害と向き合い、また真剣に悩む姿は、同じ当事者である筆者は自分と彼女たちの人生を重ね合わせて読み進めていった箇所がいくつもあった。

筆者はこれまで、高等教育における聴覚障害者支援を研究テーマとしてきた。そのなかで、聴覚障害者個人の高等教育や生活上に求めるニーズの背景にあるものとして聴覚障害

⁹ p.94に Cyrus と Steve の写真が掲載されている。

者が抱えるアイデンティティの問題、ろう文化や、きこえる世界に対する捉え方の相違にも注目してきた。冒頭で触れたとおり、本書は、研究書ではなく、一般向けに書かれたエッセイ集であるが、彼女たちの生き様、すなわちきこえない女性の現実のドラマから、今後の研究課題について有益な示唆を受けるとともに、当事者として今後の人生を歩むうえで大きなエールを受け取った。

本書のようなきこえない女性たちの自叙伝が日本にもいつか登場することを期待したい。

引用文献

都築繁幸, 1997, 『聴覚障害教育コミュニケーション論争史』, 御茶の水書房, 東京.

吉田仁美, 2009, 「Deaf Women に関する英文文献紹介」『昭和女子大学女性文化研究所紀要』, No.36, 101-114.

(よしだ ひとみ 福祉社会学科助教 女性文化研究所特別研究員)